The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	超えるということ
Author(s)	正置, 友子
Citation	臨床哲学のメチエ. 2013, 20, p. 24-28
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

超えるということ

正置友子

ロンドンで8月下旬に開催された国際児童図書評議会(IBBY=The International Board on Books for Young People)の第33回の大会に参加しました。

今大会のテーマは、Crossing Boudaries: Translations and Migrationsというもの。そのまま訳せば「境界を超えて—翻訳と移動」となります。「境界を超える」というテーマを考えるには、「翻訳と移動」を頭に置いたらどうでしょう、ということのようです。Translationの方は「翻訳」という訳語が定着していますが、Migrationの方は「移動」と訳す場合もありますが、訳語としては定着していないようです。マイグレーションとそのままの読みにすると、パソコン関係での移行や変換を指す言葉にもなります。

Migrationとは、ある(地)点からもう一つの(地)点への移行・移動を指します。従って、ある言語からもう一つの言語への翻訳もMigrationの一つの有り様であると言えます。ということは、大枠として、TranslationもMigrationの中に包括されるとみていいでしょう。

大会のテーマは、主催者(今回はIBBYイギリス支部)によって決定され、1年前から2年前くらいの間に告知され、大会開始の8か月前から10か月まえくらいに発表申込みの締め切りがあります。今回の主催者から会員に送られてきたテーマの解説は次のようになっていました。

> We will explore how books and stories for children and young people can cross boundaries and migrate across different countries and cultures. The congress will look at issues such globalisation, dual-language texts, cultural exchange and the art of translation and we will explore how literature for children migrates and translates in all its forms. (IBBY Congress-London 2012のWebsiteなど)

この文章からもあきらかですが、今回の大会では、境界(国あるいは文化の)を超えることをテーマにしている児童文学作品の研究を中心にしている、ということです。講演、シンポジウム、発表の内容を聞いていると、作品に登場する子どもたちが境界を超えなければならない状況には、二通りあるようです。一つは、自らの意志

で（往々にして、親の意志の場合ですが、それでも行った先での生活保障や希望もある）出発する場合、もう一つは、自分も家族もどうしようもなく、選択の余地なく、移動を強制される場合です。世界の各地で起こっている民族紛争、国家間トラブル、戦争の中で、無理矢理に移住させられたり、難民になってさまようことを強いられている人たちの存在です。

ヨーロッパの場合、歴史的に見て、民族は入れ混じっており、発表者の中にも、自分の父親はイタリアで生まれたがフランス人であり、母親はイギリスで生まれたがオランダ人であり、その祖父母は ... という人たちが何人もいました。こうなるとルーツを辿ることはもはや大事なことではなくなり、自分の中の多様な血液、因子、そして文化を受け入れて生きて行く道をさぐることの方が現実的であることがわかります。

悲惨な状況にあるのは、無理矢理強いられて故郷を後にして「境界」を超えさせられている人たちとその子どもたちです。子どもたちの中には、両親とも離れ、あるいは死別して、一人であるいは兄弟姉妹で「境界」を超えざるを得ない場合も少なからず存在するということです。現代の世界の児童文学は、こうした過酷な境遇に生きる現実の子どもたちを扱うようになってきています。残念ながら、日本では、こうした作品はあまり翻訳されていない現状にあり―翻訳しても読まれないだろうと思われている―こうしたことは、日本の子どもたちが、世界の状況をつかみにくい状況に置かれており、ひいては世界のことに無関心でいられることにも繋がっています。マスメディアでも、教育界でも、「グローバル化」の言葉を頻繁に使いますが、日本という島の中で安穏と暮らせるという錯覚に陥らせておいて、いくら「グローバル化」と言われても、子どもたちに実感はないでしょう。せいぜい、毎日宣伝されている「英語をしゃべるようになろう」がグローバル化だと思われているのが日本の現状のようで、本物のグローバル化から置いてきぼりになりつつあります。さらに言えば、日本というローカルなところの文化も社会も見えないようにさせられているのが日本の子どもたちでしょう。

この大会テーマを見て、私自身の発表テーマを考えようとしたときに、即座に浮かんだのは、リミナリティ (Liminality) でした。マイグレーション (Migration) がある地点から、もう一つの地点への移動を示すとすれば、リミナリティは、人のある時点から、もう一つの時点への移動を示します。共に、ある点から、もう一つの点への移動です。少し狭めて言えば、マイグレーションが (地球上の) 横への移動とすれば、リミナリティは、一人の人間の内的 (心的) 移動と言えます。もちろん、マイ

グレーションであっても、とりわけ子どもの場合、かならず、リミナリティの構造が平衡して起こります。地理的にある点からある点への移動は、成長期にある子どもたちにとって、(親の希望による移動であれ、強制的な移動であれ) 新しい点 (場所、そこの文化) を受け入れるようになるまでには、相当な精神的葛藤があるはずです。マイグレーションも含め、ある発地点から、ある着地点に辿りつくまでの葛藤期をリミナリティと名付けてよいでしょう。

今回の発表では、アメリカの絵本画家マーシャ・ブラウンの『三びきのやぎのがらがらどん』(注 1) を使って、子どもたちが、試練 (トロル) に出会い、リミナリティ期を通過して、成長していく過程を話しました。「深い谷川にかかる橋をわたる」ということが、「リミナリティを超える」を比喩として表しています。

「リミナリティ」という用語は、文化人類学において通過儀礼を研究する段階で使われるようになりました。子ども時代 (社会) からおとな時代 (社会) への移行の儀式、すなわち「通過儀礼」を代表例とします。しかし、通過の儀礼は子どもからおとなへの移行期だけに限られたものではないことを、A. V. ジェネップ (A. V. Gennep 1873-1959) は、その著『通過儀礼』(1997) の中で次のように書いています。

> 一つの特殊社会から他の特殊社会へ、またある状態から別の状態への通過は、生きているという事実の要請によるものであるから、人の一生は同じような始まりと終わりを伴う一連の各段階の継続によって成立している (注 2)。

ジェネップの原著は、今から 100 年以上も前の 1909 年にフランス語で出版されていますが、その中で、ジェネップが列挙している人生における一連のリミナリティの各段階をまとめてみると、次のようになります。誕生、幼年期、思春期、婚約、結婚、妊娠、父親になること、階級昇進、職業的専門化、死、葬送などです。

この列挙を見れば、人生はリミナリティ期の連続であるといえます。すなわち、人間は、誕生から往生の時まで、生きることの痛みを伴う経験をするように予定されているということです。人生の途上で思いがけない不幸が襲い掛かることもありますが、一方、ひとつの人生を生きるだけで、越えなければならない「リミナリティ」がいつも待ち伏せしていると言えます。そして、「超えること」で、「成長」や「成熟」があるのではないでしょうか。

今、「超えること」、「成長」、「成熟」をカッコに入れましたが、これからしばらく (一年くらい)、このことを考えつづけたいと思っています。今の段

階では、「成長」は子どもの時代に関係する言葉であり、「成熟」は青年期（あるいは成人式を迎える20歳）以降に使われる言葉であり、「越える」方法が違うのではないかと考えています。

物語の構成で言えば、「成長期」は、「行きて帰りし物語」である必要があり、「成熟期」は、「行ってしまって、帰ってこなくてもよい物語」でもよいと言えるでしょう。子ども（少年少女期も含む）は、「行きて帰りし物語」でなければなりません。出かけていっても帰ってくる、帰って来たいところがある、待っていてくれる人がいる、そんな物語であってほしい。「行って帰る」までの間に、遊びや冒険があり、成長の糧である様々の体験をしますが、最終的には帰るべきところに帰ってきます。それが青年期以降になると、「生きて還りし物語」に変わります。「帰る」のではなく、なんとか「生きて還ってくる」。ただし、一人で「生きて還る」という物語を生きるには、子ども時代の「行きて帰りし物語」を生きる必要がある、あった方がいいのではないか、と思っています。現実世界のなかでも、想像（芸術）世界のなかでも。

「成長期」から「成熟期」への転換点は、段階を追って体験されると考えられますので、14歳位から準備して（本人は、無意識的ですが）、20歳頃にあります。成人式は、時代や社会でことなりますが、現代は人間の寿命が延びてきているため、子ども期がぐ～んと伸び、永遠に子どもの人が増えている状況もあるような気がします。すなわち、「成長期」も「成熟期」もない人たちが増加しているようです。（要するに、リミナリティもない。）

ここで、文学作品として、一人の作家による「少年期」の作品と「思春期」の作品を紹介し、「行きて帰りし物語」と「生きて還りし物語」を考えてみます。アメリカの有名な作家マーク・トウエイン(1835-1910)には同じ複数の人物を登場させた作品が2冊あります。「トム・ソーヤーの冒険」(1876)と「ハックルベリー・フィンの冒険」(1884)です。前者は児童文学の範疇に入り、後者はヤングアダルト（思春期）文学に分類されます。なにが違うかと言えば、前者は「行きて帰りし物語」であり、後者は「生きて還りし物語」であることです。

物語のなかで、トムには両親がいません。しかし、トムを非常にかわいがってくれるおばさんがいますし、トムが帰属する社会があります。トムは冒険に出かけて行きますが、帰るべき家を持っています。どんないたずらをしようと、帰ってきたら抱きしめてくれる人たちがいて、喜び迎えてくれる地域社会の人たちがいます。いつか結婚するに違いないガール・フレンドもいて、トムはその社会で一定の尊敬を得ながら（子ども時代はこんなやんちゃもしたんだよ、と孫たちにも誇らしく話してやれる）、そんな人生を全うするで

しょう。そういう安定した社会が見えてきます。

一方、皮肉なことに、ハックには父親がいるのです。しかし、その父親は飲んだくれで、子どもの面倒はおろか自分の面倒さえみることができない。自分の父親のところは、ハックにとって帰りたいところではないのです。ハックの年齢が本文で書かれていたかどうか記憶にありませんが、ハックは、少年期から青年期へと向かう段階にあるように思われます。黒人のジムとミシシッピー川を流れて行く時期が、思春期であり、物理的にも、精神的にも、いつ死ぬかもわからない状況を、危険な「川」の流れとともに経験していきます。ハックはもう安定した社会には帰りません。帰れないのです。帰りたくないのです。ハックの精神的危機(当時の社会的価値観の否認も含めて）は、間もなく50代に入ろうとするマーク・トゥエインにとっても作家としての危機的状況を指しており、作家は川のシーンを描きながら、ハックと共に生き、ハックとともに生還することをはたした、トゥエイン渾身の作品だったことでしょう。

トゥエインは、「トム」を書いているときには、「超えること」ができなかったのですが（超えようともしなかったのですが)、「ハック」を書いているときに、何かを「超えた」のです。トゥエインは、「トム」と言う少年を、子ども時代を懐かしく見ているおとなの視点で、すなわち外側から書きました。「ハック」の時も、書きだしのときにはそうだったかもしれません。それが、書いている間に、とりわけ「ミシシッピー川」を下る間に、作者は、それまでの自分が持っていた社会的時代的価値観を超えて、ハックというひとりの少年のなかに入り、生き、多分自分でも思いもよらなかった生き方をすることになったのです。

多分、文章（論文）を書く、ということも、研究の道を通って（川を下って、あるいは川を上って)、そういうこと、何かを超えることだろう、と思っています。

◇まさき　ともこ
大阪大学大学院文学研究科臨床哲学研究室博士後期課程。
1973年、千里ニュータウンに「青山台文庫」を開設して以来、子どもたちと絵本を読む活動を40年近く行っている。
2011年度からは臨床哲学研究室に身を置き、「子ども(乳幼児)と絵本」というテーマに取り組んでいる。